

國學院大學學術情報リポジトリ

口承文芸研究はなぜ「疑似的な声」と向き合えないのか：特集日本民俗学の展望を拓く：
伝承文学専攻開設二十五周年記念

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯倉, 義之, Ikura, Yoshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000271

口承文芸研究はなぜ「疑似的な声」と

向き合えないのか

飯倉義之

一、口承文芸と口承文芸研究の現在

口承文芸研究は文学に縛られている、と言わざるを得ない。急いで付け加えるが、口承文芸は文学ではないと言うのではない。ここで主張したいことは、口承文芸研究が文学を意識しすぎてきたことの弊害が、ここにきて露わになっていることとである。その弊害とは、口承文芸研究が現在を対象にしかねている、ということである。さらに言えばそれは、説話以外の口承文芸研究が発展してこなかったことの遠因でもある。

口承文芸の研究者を主な会員とする学会は、歌謡研究を除いては日本口承文芸学会、日本昔話学会、説話・伝承学会の三学会が存在し、それぞれ機関誌として『口承文芸研究』、『昔話研究と資料』、『説話・伝承学』を発行している。『口承文芸研究』の最新号、二〇一六年三月発行の三九号を概観してみる。

当該号は論文七本、大会シンポジウム報告四本、大会講演を軸とした特集論文三本、例会シンポジウム報告五本、書評三本と新刊紹介で構成されている。論文内容を大まかにまとめれば、それぞれ、昔話の話型と伝承的表現の特徴、佐渡の八百比丘尼伝説、藤沢衛彦の伝説研究、歌謡の始原研究、語り物を例とし

た口承文芸論、昔話の伝承過程と語り口の比較、東京在住の竹富島出身者の伝承について論じている。大会シンポジウム「口承の記憶と継承」の報告は、全体のまとめに続いて、災害記憶を語りとしていかに受け継ぐか、語り手の立場からの昔話の伝承について、記憶研究の視座からの昔話伝承の分析が論じられている。特集論文はユーラシアの英雄叙事詩の比較研究、柳田國男のグリム研究の再検討、柳田によるグリム注釈書への書込みの考察、例会シンポジウム報告は趣旨説明に始まり、東アジアにおける昔話モチーフの比較、データベースを利用しての人の死の起源説話の考察、環太平洋地域の神話論と、全体のまとめで構成されている。

昔話の話題研究、伝説のケーススタディ、研究史、国際比較など、いずれの論考も価値あるものであり、学問領域において重きをなすものであることは疑いがない。だが、口承文芸が現在置かれている状況と正面から対峙するような論文が、少なくともないだろうか。

もちろん現在に目配りした論文も当該号にはいくつも掲載されている。例えば、野村敬子「都市語りの可能性——第六八回研究例会を巡って——」は、竹富島の郷友会会員の方々を招いた例会を一つの例として、日本各地から都市圏に上京して就職・

結婚し、都市圏で生活している人々の伝承を、現在の都市民俗としてどのように考えていくことができるかという問いと向き合っている。花部英雄「被害記憶の形象と継承」は、東日本大震災に重点を置きつつ、災害といかに向き合い、その記憶をどのように継承するかを現在の問題として論じている¹⁾。さらに言えば、フィールドワークを基とした成果としての論文は、すべて現在の状況であり、口承文芸研究は現在と否応なく向き合っているということができるだろう。さらにデータベースを利用した新たな研究成果の提示も、現在の研究のありようを示しているという意味で、十分に現在と向き合う論考である。これらのことに異論はない。口承文芸研究は否応なく現在と向き合わざるを得ない領域である。

では一体何が不足だと考えるのか。それは、現在において生起する話やこととは向き合おうとする論考の不足である。二〇〇〇年前後以降、インターネット環境の普遍化とウェブサイトによる個人の情報発信の強化、2ちゃんねるに代表される巨大匿名掲示板やブログ等のテキストサイトの流行、携帯電話とeメールの普及、FacebookやTwitter等のSNS（ソーシャル・ネット・サービス）の参加者の増大や、携帯電話に代わるスマートフォンでの普及によるモバイル環境の拡

大、動画投稿サイトでの交流の増加や動画投稿者の有名化・職業化、LINE等の閉じられたSNSの登場、さらにはVR（仮想現実）・AR（拡張現実）技術の普及が始まるなど、コミュニケーションをめぐるありようは目まぐるしく変化してきたし、これからもしていくことは間違いない。

こうしたコミュニケーションは、電子的に表示されるディスプレイ上の文字列であるという意味では、厳密には口承文芸——口伝えの声の文芸——ではない。しかし、それまで口承文芸と比較されてきた書承文芸・記載文芸——記録された文字の文芸——ともまた異質な存在である。eメールやweb、SNSのコミュニケーションは声ではなく、文字を用いて交わされるものである。しかしその文字のコミュニケーションは、かつての書承文芸・記載文芸の広まり方であった肉筆による書写や印刷による頒布のようなタイムラグがなく、コミュニケーションの場としては口承の場と響き合うような、即時のコミュニケーションの場として口承の場と響き合うような、即時のコミュニケーションが形成される場である。このような場から生まれ出る話やことばが、現在の私たちの口伝えの話やことば、記載された話やことばにも多くの影響を与えている。

実際に現在、商業メディア等で取り上げられる現代の世間話である「都市伝説」のほとんどは、webのコミュニケーション

ンによって生み出された話である。また現在のことばに注目すると、もはや年末の商業メディアの風物詩ともなったといえる「ユーキャン 新語・流行語大賞」（現代用語の基礎知識選）の二〇一六年度大賞にノミネートされた三〇語のうち「神つてる」「くまモン頑張れ絵」「PPAP」「保育園落ちた日本死ね」「ポケモンGO」などはweb独自の語である。特に「保育園落ちた日本死ね」は、保育園に子どもを預けることが叶わなかった復讐希望の母親の匿名ブログから火がついて注目され、webで賛否を呼んでノミネートされるに至ったことばであり、webと現実の声の相互関係を象徴した語だといえるだろう。

しかしこうした領域への問いかけは、未だ深められていない。数少ない例外として、伊藤龍平が早くからweb上の伝承に目を向けてきた成果を総合して世に問うた『ネットローア——ウェブ時代の「ハナシ」の伝承——』（青弓社、二〇一六）がひとり、輝かしい成果としてあるほかには、散発的な動きにとどまっているといわざるを得ない。

しかし、このことは口承文芸研究者の怠惰や怠慢を意味しないと考える。現在、世間がwebと密接に響き合いながら変化していることは、研究者自身が生活者として感じ、受け止めていくはずである。その技術が口承文芸に与える影響も、自身が

生活者としてそれらの技術の利便性を享受しながら、十二分に理解していると思われる。

それでは、なぜこうしたwebと向き合う現在の領域は深められていかないのか。それは、webで交わされる話やことばに顕著であるような、物語性が希薄で断片的な口承文芸を研究の対象とし、収集し、整理し、考察する研究が、口承文芸研究全体において積み重ねられてこなかったことに起因していると考えられる。webに象徴されるような、移ろいやすくバラバラになりやすいことばと向き合う研究方法を確立してこなかった経緯を考えるには、口承文芸研究の歩みを振り返らなくてはならない。

二、研究史に見る「口承文芸」

「口承文芸」は、柳田國男が民俗学の範疇に設計した、わたしたちの生活における「ことば」を対象とする領域だ。具体的には、日々作られることばの技術である「命名」「新語作成」や、生活の中で受け継がれる言語芸術である「ことわざ」「謎（いわゆる「なぞなぞ）」、「日々の仕事や遊び・祭りを彩る「民謡」「童唄」などのウタ、リズムをもった物語である「語り物」、現

在では「民謡」のほうが通りがよくなった、カタリとハナシの分野である「昔話」「伝説」「世間話」に分類される「民間説話」などの、声のコミュニケーション——「口」で語り耳で「承る」「文芸」——の領域である。

柳田は一九三〇年代に、昔話をかつて存在した「一族の神話」の破片・残存と位置づける「神話零落説」を軸として昔話論を展開した。と同時に、民俗学に関心のある地方の研究者に向けて、在地の口承文芸の収集・分類を働きかけた。口承文芸研究は昔話研究を中心として発展してきたといえる。

第二次世界大戦による中断を挟んで戦後、口承文芸研究は大きく発展する。まず録音機器の発達が口承文芸研究を後押しする。「デンスケ」の愛称で知られたオープンリール式録音機が現場に投入された。高価な機械で利用者は限られてはいたが、それまでは民俗語彙や語り口や抑揚やリズムを注記しつつ、聞き書きのメモを取るしか方法がなかった研究者たちが、話者の〈声〉を直接に記録できるようになったのである。各地の民俗学に関心のある教員や、大学・高校で組織された民俗学研究会・昔話研究会が、学校の備品の録音機を借り受けて各地で口承文芸の記録を行い、積極的に昔話や民謡の音声資料を記録していった。そうした録音記録はテープ音声から文字に起こされ、

学術誌に資料報告されるほか、商業出版、研究会の自費刊行物等の資料集としてまとめられ、共有されるようになった。この時期の口承文芸資料は建材に至るまで研究の礎となっている。^④

ここで特筆すべきは、一九六〇年代に説話文学・物語文学・和歌文学の読解に口承文芸や民俗学の成果を積極的に利用しようとする機運が高まり、国文学分野と口承文芸とが密接に連携し始めたことである。説話のモチーフの組み合わせからなる〈話型〉は、これまでは別個の完成された説話と考えられてきた説話同士の伝承関係を「話材」へと分解して組み替えるまなざしを提供した。このまなざしが大きな影響を与えたのが、説話文学研究の分野であった。戦後に昔話研究をリードしたのは、臼田甚五郎や福田晃、大島建彦、稲田浩二、野村純一ら、大学に所属する国文学系の研究者だったと花部英雄は指摘する。彼ら国文学を学問基盤とした昔話研究者たちは、自身が探訪調査で収集した資料を古典文学と比較し、説話文学・物語文学・和歌文学や中世芸能を読み解く新たな視座を提供した。この時期、中世文学研究や芸能研究の学術誌も、昔話や民謡のテープ起こし資料を積極的に掲載した。

こうした文学研究と昔話研究との蜜月を象徴する出来事が、一九六二年の説話文学会の結成である。同会は「説話や説話文

学に深い関心や研究意欲をもつ民俗学・国文学・国語学などの研究者の集まり」と宣言している通り、昔話研究と説話文学研究、口承文芸と書承文芸の切り結ぶ場を目指して結成された会であった。説話文学会では、久松潜一や市古貞次といった重鎮を筆頭に、高崎正秀や三谷栄一、長野晋一、佐竹昭宏らの国文学研究者と、臼田ら国文学系の歌謡研究・昔話研究者が、口承と書承の双方から説話文学を追及していった。第一回研究例会「今昔物語の成立と構造」では「口語り」を巡って議論が交わされ、毎号の新聞紹介には昔話資料集が取り上げられた。臼田が事務局を引き継いで発行した機関誌『説話文学研究』一号（一九六八）に、昔話研究の論文である、野村純一「河童が火を請う昔話」が掲載されている。このような、説話の内容や表現に注目し、古典文学や芸能と接続させる昔話研究が主流となつて、口承文芸研究をリードしていく。それは「口承」性よりも「文芸」性を重視する立場であったといえるだろう。

三、「世間」話と世間「話」の対立

前節で整理した、口承文芸を文学に接続し文学の一環として研究する態度は、口承文芸の内容——古典文学や芸能と比較す

るための、話型やモチーフ、詞章——を重視する立場を取って学界をリードしていくことになる。昔話や民謡のうちに、古典文学や中世芸能から受け継がれた説話や詞章の系譜を発見し、そこから日本の文学および文化のありようを見出そうとする立場だといっている。口承文芸の不幸の一つは、古典文学との接続を重視する口承文芸研究が、現在を考えようとする口承文芸研究と衝突してしまったことにある。その衝突が最も端的に現われたのは、話し手と聴き手に近い場所である「世間話」の領域であった。

西郊民俗談話会の機関誌『西郊民俗』二五号(一九六三)は「世間話特輯号」と題されている。重信幸彦や小池淳一、高木史人は、この『西郊民俗』誌上における論争が、世間話研究の一画期であったと指摘する。高木は同号において「世間話研究が「類型」「伝承性」を整理する口承文芸の一員としての研究をめざす(最上孝敬・大島建彦)のか、そうではなく言葉の交わされる「時空(場)」の問題として分類よりも、世間・集団・個人の関係性の解明をめざす(井之口章次)のか、という重要な論争が行なわれた」と整理している。この「世間話の性格論争」を概観してみる。

西郊民俗談話会が当時慣例としていた毎年十二月第三週土曜日の共同課題討議の課題に、一九六二年は「世間話」が挙げられた。特輯号執筆者の全てが共同討議に出席してはいないが、議論の経緯を踏まえて執筆していることは間違いない。収録論文を以下に掲げる。

最上孝敬「世間話研究の目的とその分類」／井之口章次「世間話研究の意義と課題」／桜田勝徳「世間話の討論会合へ」／大島建彦「世間話のとらえかた」／中島恵子「現代の世間話」／川端豊彦「世間ばなし・げるまにか」／安間清「世間話について」／後藤義隆・上村正光・大森義憲「郡内と世間話(共同討議)」／梅木寿雄「世間話資料―山形県庄内地方―」

討議の中心となった論文は井之口の「世間話研究の意義と課題」である。世間話研究に対して問題を提起する井之口論文の骨子は、討議の事前準備のため前々号の会誌に同封されて会員に配られたとある。そこからの討議は自然、井之口論文に賛否を示す形で展開した。

井之口は「世間話」を共同討議の題目に選んだのは世間話が

立ち遅れているからであると、世間話研究を進めるための「五つの課題」を提起する。

一、集団のおかれている立場や環境を理解し、関心の所在を明らかにして世論の基盤を浮き出す。／そのためには、ある事件に関する反応を集める世論調査ふうの調査が必要である。

二、集団の性格や意志を求める。／そのためには、ある地域集団の中でどういう話題が好まれるか、総合的な調査が必要となる。できれば地域類型を求める。

三、集団内における個人の感情の基準や常識線を求める。

／話題を通して、喜、怒、哀、楽、誇、恥、悔、憂、朗などの感情を見る。

四、世間話の話題の中から、文芸の萌芽や文芸の破片を求める。／そのためには、各地の世間話の中から類型を見出す。

五、世間話と一般習俗との関連。また世間話の中から一般習俗の破片をさがす。／この作業は従来もおこなわれてきたと認められる。

井之口の挙げる課題は大きく二つに分かれる。四・五は世間話の「類型」を通じて「文芸の萌芽や文芸の破片」「一般習俗の破片」を探すという「従来もおこなわれてきたと認められる」方法であった。対して一・二・三では、世間話を通して「集団のおかれている立場や環境」「集団の性格や意志」「集団内における個人の感情の基準や常識線」という、集団に内在する「世間話を享受する論理や感情の基盤」を探る世間話研究であった。

前者を世間「話」の研究とするならば、後者はその話の生成や享受のありようを追う、「世間」話の研究だと整理できる。

しかしこの井之口の問題提起は理解を得られなかった。いかなる点が拒絶されたのか。まず一つは、井之口自身、共同討議では「たとえば人工衛星が飛んだというふうな、最新の話題まであつかおうとすると、收拾がつかなくなってしまうのではないか、というような心配もあつた。時代なり話題なり、あるいは話題の類型の上に、何かの制限を設けるべきだというのである」^⑩「まともしているように、民俗学の考察の俎上に「最新の話題」を持ち込もうとした点が忌避されたようだ。

この点に対して大島は、

もちろん、世間話の研究は、なにも民俗学だけでおこなわれるとは限らない。ただし、それを民俗学の立場でとりあげるには、当然のことながら、その民俗性・伝承性を中心に考えるべきであろう。¹¹⁾

もちろんすつかり近代化した社会でも、かなり変質した世間話が、あいかわらず生きつづけるであろう。そこには、なお古風な伝承とのつながりを認めることができよう。そのようなつながりはとにかく、そうした話が新しい流行としてとらえられるかぎり、それを対象とする研究も、社会学などの分野に属させるべきではなからうか。¹²⁾

として、「民俗性・伝承性」を核としてその範囲を限定する必要を述べ、そうして社会学と心理学との差異、民俗学の研究法の独自性を「話型」の比較研究にあると指摘する。

従来の民俗学で、いくらかでも世間話に注意がむけられたとすれば、それは昔話や伝説と比較検討すべき資料とされていたからであろう。たしかに、多くの世間話の材料は、さまざまな昔話や伝説からとられていた。しかし、昔話や伝説との一致をつきとめていくだけでは、なおとらえきれ

ないような話の種もすくなくなかった。どうしても世間話を世間話として取りあげ、その型を整理しなければならぬように思われる。世間話のタイプを設定するのは、むやみにその範囲を限定するためではない。民俗学の立場で、世間話の研究を進めていこうとすれば、おのずから比較の基準が必要となってくるのである。¹³⁾

しかし井之口提言は世間話の「類型」を否定したものでなく、むしろ方法の基礎として「話型」を重視していくべきだとする主張ですらあった。井之口は先の引用に続けて、

しかしながら、近年話題になつたヒマラヤの雪男や、空とぶ円盤のようなものを、世間話の枠外に押し出してしまふわけにはいかないし、むしろそうした、とらえどころなく生起消滅する話題や、それらの話題に対する民衆の反応自体が、世間話の本質のようにも思えるのである。これは世間話の話題に類型があるということと、必らずしも対立しない。口から出まかせの思いつきをならべているつもりでも、その中から類型や伝承的なものを探り出すことは、かなりの程度まで可能だと思われるからである。¹⁴⁾

と述べるように、世間話の類型研究と世間話の生成・受容の研究は対立するものではない。井之口の問題提起はあくまで世間話の「類型」と「背景」を「同時に」考えようということに過ぎず、大島らが優先する、世間話の「話型」の整理を先ずるべきという主張は、本来は井之口の課題一・二・三を退けるものにはなりえない。

ここに当時の口承文芸研究の「文学」へのとらわれが見える。話型研究の方法は、説話文学研究に目覚ましい成果を挙げた。話型もしくはモチーフ、もしくは詞章というまとまりを通じて民間説話・民間歌謡と古典文学との接続を通じて、口承文芸研究者は口承文芸も文学であるという自負を持ち得るようになった。その自負は正当なものであったが、それがかえって口承文芸を文学以外の方法で考察する視点——大島の「社会心理学などの分野」——と協働することを妨げてしまったのではない。大島による井之口論文の拒絶は、世間話から「世間」を分析しようとした井之口と、口承文芸の領域から「話」そのものを考察する大島との、世間話観の裂け目でもあった。口承文芸は、文芸でなければいけなかったのである。それは同時代に口承文芸研究が求められた役割であったといえる。

以降の口承文芸研究は、昔話に代表される「物語性を持ち、伝承されてきた説話」の研究を中心に発展・深化していく。もちろん、物語性と伝承性を中心とした話型研究が、十分な有効性を持ち、大きな学問的成果を挙げていったことは疑いえない。その功績を貶めるものではないし、当時の研究者に現在表面化している問題の責を負わせたいわけでもない。ただ「とらえどころなく生起消滅する話題や、それらの話題に対する民衆の反応自体」をどうとらえるか、つまりは新たなはなしやことばがいかにして生成し、どのように広まり、定着し、あるいは消滅するのかがといった、物語性の希薄な、あるいは物語性を持たない口承文芸の領域と向き合うかを深める機会を逸するために、機がここにあったことを、今からその領域に向き合うために、確認しておくなくてはならないのである。

この話型≡文学へのとらわれは、口承文芸研究の深部に受け継がれてゆく。一九八〇年代以降、話型に偏重した口承文芸研究の反省からの、脱却の試みが起きた。⁵⁵その動きの一つに、重信幸彦・大月隆寛らによる「都市伝説」の紹介を挙げうる。アメリカの民俗学者、ジャン・ハロルド・ブルンヴァンは「都市伝説 (urban legend)」を、「現代の都市的な文化を背景として、友人の友人が実際体験したこととして話される、出所真偽不明

の現代の説話」と定義した。重信らは、研究者の生活するいま・ここでまさに生起している民俗や説話を見つけ出し、考察する方法として「都市伝説」を世に問うた。¹⁶⁾

しかし口承文芸研究は都市伝説に昔話や伝説、古典文学と共通する「話型」を見出だし、現在のはなしを説話文学に接続しようとする考察が多く展開されることとなった。都市伝説の議論も落ち着いた時期に、野村純一は『日本民俗大辞典』の「世間話」の項目で以下のように都市伝説を概論する。

「今日他にいう「現代伝説」「都市伝説」の類語も、先行する例話からの借用モチーフ、あるいはそれらからの再生産という具合に理解すれば、いずれは一過性の噂や噂話と、一方、民間説話としての世間話との区分も確実に認識しようと思われれる。」

野村はここで「一過性の噂」と「民間説話としての世間話」の区分は可能にして必要であり、世間話の一形態である都市伝説は「先行する例話からの借用」「再生産」であると指摘している。類型と伝承性を口承文芸の必要条件とする定義は、都市伝説に関してさえ、辞典の記述にまで普遍化された。話型や伝

承性に基づいての考察はもちろん必要である。だが都市伝説の初発であった「同時代に話が生成・流布するメカニズム」への問いかけは共有されないうまま、都市伝説は商業メディアに消費されてしまった。¹⁷⁾

そうしてその溝は現在も埋まっていない。日本口承文芸学会の二〇一二年の大会で、本稿執筆者を含めたパネリストが、学術用語としての都市伝説を清算するシンポジウムを開催した。¹⁸⁾

このシンポジウムに対して学会の会報に掲載された報告がそれを象徴する。¹⁹⁾そこでは「ひどいめまいに襲われ、帰阪後も長い頭痛に悩まされた」参加者が「都市伝説の『さ』が具体的に提示されていないこと」を理由に「あれは口承文芸ではなくて、やはり都市民俗学のシンポジウムだったのだ」と整理して頭痛を癒す様子が報告されている。「口承文芸」を会報報告者の言う「都市民俗学」＝説話の生成・流通する背景を考える方法、と切り離す学的潮流が、いまだ口承文芸研究を縛っているといわざるを得ない。口伝えの文芸は、もつと自由に受け止められ、深められなくてはならない時期に来ているはずなのに、だ。文学でない口承文芸研究を「めまい」「頭痛」といった態度で拒否する、文学へのとらわれがここに存在する。しかしこうしたとらわれをよそに、現実には拡張し続けているのである。

四、現在のことはに向き合うために

現在のことはの状況を整理しよう。二〇〇〇年代以降はブログ、Facebook、twitter等のSNS、youtube等の動画コンテンツ、スカイプ、LINE等の双方向の通信メディアで広まる新たな物語が膨大な量をもって世間を飛び交っている。これらの言説は声の文芸ではもちろんない。しかし、その即時性や広まりにおいては、声のコミュニケーションに近い即時性や広まり方、変化のありようを持つことがうかがえる。こうした言説は疑似的な声、デジタルな文字＝疑似的な口承といえる。口承文芸研究は現在、こうした新たに構築され、膨大に生産され、高速に消費されている「疑似的な声」に対して、対応できていない。

その要因の一つに、口承文芸研究が文学研究であろうとした時期に端を発する、物語性と伝承性を持つ口承文芸を重視し、それらの希薄な領域を対象とする方法論を深めてこなかったことを挙げうるはずである。散発的なwebのことはあまりにも「軽い」テキストであり、「物語」として分析することが難しいため、口承文芸研究は現在の「疑似的な声」を前にしてそ

の扱いに苦慮しているのではないか。口承文芸をその文芸性から解放し、声の響き合う場の問題として考えようとした動きが一九九〇年代後半にあった。山田巖子らが提唱した〈口承〉研究だ。²⁰〈口承〉研究の視座は、再び検討されなくてはならない。

そうして口承文芸を文学と接続させることも、さらに深めなければならぬ。現在の口承文芸研究者の文学理論は、すでに過去のものである。口承文芸を文学の領域に位置づけよるためには、近現代文学をはじめとする文学理論と口承文芸研究とが協働を可能にするべく学ばねばならない。そうした試みは、近代文学研究者と口承文芸研究者との協働により編まれた、野村純一編『日本説話小事典』(二〇〇二)としてすでにある。

また口承文芸の領域からは、完成された「作品」として読む強度をもたない物語群を、群れの文芸として位置づけることで新たな地平を拓けるはずである。それは現在、文学研究で位置づけの進んでいるライトノベルや少女小説²¹といった、エンターテインメント小説の読解にも寄与しうる働きかけとなるだろう。いずれにせよ、口承文芸という領域は一つの物事を追いかけている。声により紡がれる表現の持つ根源的な魅力への問いである。それについて迫る方法の一つではない。声や語りや物語を表現する方法がさらに多様化して現在、その根源に迫る方

法も多様化せざるを得ないということを持って、とりあえずの結論としたい。わたしたちのコミュニケーションの大きな部分を担うようになりかけている「疑似的な声」といかに向きあうかは、これからの課題なのである。

注

- (1) 震災・災害と伝承は、今日的なテーマとして重要視されている。『口承文芸研究』三八号(二〇一五年三月)においても、大会講演を軸として特集「震災と口承文芸」が生まれ、一〇本もの論文が集中的に掲載されている。
- (2) 「現代用語の基礎知識・選 ユーキャン新語・流行語大賞 2016 ノミネート語」<http://singo.jiyu.co.jp/nominate.html> (二〇一六年二月一五日参照)。
- (3) ただし、早くに竹原威滋が「口承文芸と電承文芸」『語りの世界』二五(語り手たちの会、一九九七)でこの領域の重要性を指摘していることは、特筆すべきである。また、早くに現在の説話にアプローチしていた社会心理学の領域での動きについては、松田美佐「うわざとは何か」(中央公論新社、二〇一四)を参照する。
- (4) また、一九五〇年代には木下順二ら左派文化人の「民話運動」が民話ということばを広めた。次いで一九七〇年代には「ディスカバー・ジャパン」ブームを背景とした「民話ブーム」が到来し、松谷みよ子が主導した日本民話の会や、瀬川拓夫の率いた民話と文学の会などを中心に、各地で地元の民話を研究する会が組織された。またTBSのテレ

ビアニメ「まんが日本昔ばなし」(一九七五〜九四)が好評を得るなど、学界の外でも口承文芸の重要性が広く世間で認知されていたことは注目しなくてはならない。

- (5) 花部英雄「昔話研究の現在とこれから」『昔話と呪歌』三弥井書店、二〇〇五。同「昔話研究における民俗学的方法は終わったか」『日本民俗学』二八一、日本民俗学会、二〇一五。
- (6) 佐々木八郎「あいさつ」『説話文学学会報』一号、説話文学学会、一九六二。
- (7) 「第一回研究例会記録」『説話文学学会報』二号、説話文学学会、一九六二。
- (8) 重信幸彦「世間話」再考―方法としての「世間話」へ―『日本民俗学』一八〇、日本民俗学会、一九八九。小池淳一「世間話と伝承―付〈資料〉弘前の学生たちのこわい話―」『境界とコミュニケーション』弘前大学人文学部、一九九五。高木史人「世間話」野村純一ほか『日本説話小事典』大修館書店、二〇一〇。
- (9) 井之口章次「世間話研究の意義と課題」『西郊民俗』二五、西郊民俗談話会、一九六三、五頁。
- (10) 同前
- (11) 大島建彦「世間話のとらえかた」『西郊民俗』二五、西郊民俗談話会、一九六三、九頁。
- (12) 同前、一三頁。
- (13) 同前、一一頁。
- (14) 井之口前掲論文、五頁。
- (15) 都市伝説の紹介のほかに、野村純一の語り手論や、山田巖子の世間話研究、根岸英之の生活譚、米屋陽一のムラばなしの提唱などの試みを挙げる。
- (16) J・H・ブルンヴァン『消えるヒッチハイカー―都市の想像力のアメ

- リカー」新宿書房、一九八八「原著一九八一、大月隆寛・菅谷裕子・重信幸彦訳」
- (17) 拙稿「都市伝説が「コンテンツ」になるまで―「都市伝説」の1988〜2012―」『口承文芸研究』三六、日本口承文芸学会、二〇一三。
- (18) 小池淳一「シンポジウムの趣旨と成果および展望」、飯倉前掲稿、重信幸彦「都市伝説」という憂鬱」、山田巖子「都市伝説と「経験」、渡部圭一「民俗学の1980年代と「都市」概念」『口承文芸研究』三六、日本口承文芸学会、二〇一三。
- (19) 廣田取「口承文芸としての都市伝説」『伝え』五一、日本口承文芸学会、二〇一三。
- (20) 〈口承〉研究の概要は、山田巖子「口承―〈口承〉研究の展開―」『日本民俗学』239（日本民俗学会、二〇〇四）にまとまっている。
- (21) 一柳廣孝・久米依子編著『ライトノベル研究序説』青弓社、二〇〇九。一柳廣孝・久米依子編著『ライトノベル・スタディーズ』青弓社、二〇一三。山中智省『ライトノベルよ、どこへいく』青弓社、二〇一〇。久米依子『少女小説』の生成』青弓社、二〇一三。大橋崇行『ライトノベルから見た少女／少年小説史』笠間書院、二〇一四。嵯峨景子『コバルト文庫で辿る少女小説変遷史』彩流社、二〇一六、など。